# 11［小説］『水の』

　たしかに私には、かなりのものがされていた。「おばあちゃんがってくれたっていいのよ。よくお父さんにａタノみに来ていたじゃない」とうとう私はそんなことを言った。祖母はショックを受けたように、一瞬硬直し、それから①まじまじと私の顔を眺めた。「子供っていうのはｂゾンガイよく見ているものだねえ」ため息まじりに祖母は言った。「いやんなっちゃうよ」

「尾萩材木のために遣ってよ。お父さんが跡を継がなかったおびに」

　祖母は首を横に振った。「けっこうだよ」「いいから遣ってよ。お父さんだって、きっといいって言うと思う」

「ばかだねえ。あれがそんなことを言うもんかい。お前のために遺したものだよ。それに、尾萩材木はもうおしまいなんだ。今さらお金なんて要らないよ。栄介はね、近々店を畳むつもりでいるんだよ。残念だが仕方がない。今は栄介の代だしね、栄介がそう決めたんならそれに従うよ」「尾萩材木がなくなっちゃうの？」「Ａ立ち行かないんじゃ仕様がないだろ。あの子にはい目ばかり見させてしまったよ。正式な跡継ぎじゃないなんて、中途半端な立場でいつまでもやらせて、こんなことなら、もっと早く継がせておけばよかった。長男だの次男だのってこだわりをさっさと捨てたらよかったんだ」祖母は仏壇のところへ行って、勢いよく鈴を鳴らし線香をあげると、静かに正座した。「この子の方は跡を継がないって早くから宣言してたのにねえ、こっちは諦めきれずに。子供の時から、またとんでもなく出来が良かったからどうしてもねえ。それに引き換え、次男はぱっとしなかったからさ。……親ってのは、ｃザンコクなもんだよ。②愚かでね」

　父は、自分が材木屋の跡継ぎに向いていないというのを悟っていた。ああいう仕事は栄介の方が向いているんだ、私は父がそうつぶやくのを何度も聞いたことがあった。

　祖母は、また、何度目かのお経をあげはじめた。「おばあちゃん、ほんとにそれでいいの？　ほんとにお店がなくなっちゃっていいの？」

　祖母は答えなかった。しばらくして、お経がやみ、③「ああ」というのが聞こえた。「納得した。それが精一杯」そう言って、こちらを向いた。「先に死ぬでないよ」祖母が言った。「もう誰も、おばあちゃんより先に死んではいけない」　祖母がｄシンケンな目で私を見つめていた。「もう何も願わない。それだけえばいい」私がうなずくと、祖母はそれを真似るように何度もうなずいた。あやふやな気持ちで、かすかにうなずいただけだったのに、そうやって何度も祖母にうなずかれ、私の中に何かが刻印された。

「安心した」祖母がそう言って立ち上がり、私に近づくと、いきなり両手で私のを挟んだ。「血の気が少し戻ってきている」祖母の手のひらは、くちゃで、ごわごわしていた。「日にあたるがいい。もっと日にあたるがいい。御覧。いい天気だ」地球の外が透けて見えるような空が、窓の向こうに広がっていた。輝く夏の光は、無限に降り注ぐかのよう。ややｅ茫然とした心地で、私は空を眺めた。光は力そのもののように見えた。

◆漢字

本文中の二重傍線部ａ～ｅのカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　波線部Ａの語句の意味として最も適当なものを次から選べ。7点

ア　後継者が育たない

イ　商売が成り立っていかない

ウ　話し合いがまとまらない

エ　人間関係がうまく築けない

オ　自立することができない

〔　　　〕

問２　傍線部①とあるが、このときの祖母の気持ちとして最も適当なものを次から選べ。8点

ア　店の経営のことについて、父を亡くしたばかりの私にまで心配をかけさせてしまい、深く恥じている。

イ　子供が聞くべきではない大人の話を私が盗み聞きしていたことを知り、憤りを感じている。

ウ　決して触れまいと思っていた亡き父のことを、気丈にも話し出した私を見てに思っている。

エ　店のためのお金を父から借りようとしていたことを、私が知っていたことに驚いている。

オ　自分の今後を慮ることなく、店のために安易にお金を使おうとする私の判断の幼稚さにれている。

〔　　　〕

問３　傍線部②とあるが、栄介に対する自分のどのような行為のことを「愚か」といっているのか答えよ。8点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問４　問３の理由を二つ答えよ。5点×2

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問５　傍線部③とあるが、「ああ」と答えたときの祖母の気持ちとして、最も適当なものを次から選べ。8点

ア　栄介が閉店を決断したことを誇りに思っている。

イ　店を畳まざるを得ないと自らに言い聞かせている。

ウ　店を守り続けてきた栄介に感謝の念を抱いている。

エ　長男への憤りを表情に出すまいとこらえている。

オ　優しさゆえの私の甘さに不安を感じている。

〔　　　〕

問６　本文の内容として最も適当なものを次から選べ。9点

ア　父を失った悲しみをこらえる私を不憫に思い、祖母は彼女の心の支えになろうと決意している。

イ　息子達を犠牲にしたことを悔やむ祖母を、私は明るく振る舞うことで励まそうとしている。

ウ　私は父と叔父との葛藤を聞かされて驚くとともに、当時を振り返り苦しむ祖母を気遣っている。

エ　自分に対する祖母の思いを感じ取った私の中に、前向きに生きようとする力が生まれつつある。

オ　私は祖母の身勝手な振る舞いが叔父を苦しめたことを知り、自分の行く末に不安を感じている。

〔　　　〕

【解答】

漢字　ａ頼（み）　ｂ存外　ｃ残酷　ｄ真剣　ｅぼうぜん

問１　イ

問２　エ

問３　すぐには店の跡を継がせなかったこと。

問４　次男であることにこだわっていたから。

　　　兄と比べて出来が良くなかったから。

問５　イ

問６　エ

■覚えておきたい語句

□28　茫然……………………気抜けしてぼんやりとしているさま。

〔場面解説〕

　問題文は、亡き父の一周忌後の場面であり、視点人物である「私」と祖母の会話を中心に構成されている。尾萩材木を畳むという話題をきっかけに、二人の息子、尾萩材木への思いが祖母の口から語られる。そして、父を亡くした「私」を思いやる祖母の気持ちを感じ取った「私」の中に、前向きに生きようとする思いが生まれ始める。

〈作者＆出典〉大島真寿美（おおしま・ますみ）一九六二年（昭和37）愛知県生まれ。小説家。一九九二年「春の手品師」で文學界新人賞を受賞。『の家』で単行本デビュー。二〇一二年『ピエタ』で第９回本屋大賞第三位。作品に、『チョコリエッタ』『すりばちの底にあるというボタン』『やがて目覚めない朝が来る』『青いリボン』『戦友の恋』『ふじこさん』など多数。本文は、『水の繭』（角川文庫、二〇〇五年）より。

【読みのセオリー】

★情景描写の意味を考える

　「何度も祖母にうなずかれ、私の中に何かが刻印された」（24行目）とあるが、それ以降の文章を読んでも、「私」の目に映る情景描写と情景を見ての私の感想があるのみで、私の中に刻印された「何か」について直接には言及されていない。しかし、その情景描写は客観的に外部に展開されているものではなく、主人公の今の心がそう見せているのであり、心情を暗示しているものと言えるのである。

■読みのセオリー［実践］情景描写の意味を考える

問６　次の空欄にあてはまる言葉から、主人公の心情を読み取ってみよう。

地球の外が透けて見えるような空が、窓の向こうに広がっていた。輝く夏の光は、無限に降り注ぐかのよう。

光は［　　　　　］に見えた。

　　　　＝

　　主人公の心情

〔解答〕　力そのもののよう

☆「セオラム補充問題」　問題は、次の３種類があります。

　　＊差し替え　　　……該当の問と差し替えるもの

　　＊追加　　　　　……同じ問で、追加された問題

　　＊新問　　　　　……追加可能な新たな問題

＊新問

問　６行目「祖母は首を横に振った」とあるが、その理由を二つ答えよ。

［答］　お金は父が私のために遺したものであるから。

　　　　店を畳むことになったため、祖母はお金を工面する必要がないから。

＊新問

問　7行目「ばかだねえ」とあるが、この時の祖母の気持ちとして最も適当なものを次から選べ。

ア　父の遺産を店のために遣おうとする私に愛しさを感じつつも、その優しさゆえの甘さをたしなめている。

イ　店のためにお金を遣おうとする私の思いやりに感謝しながらも、なかなか素直になれないでいる。

ウ　父の意志を優先して店のために遺産を遣おうとする私に感謝しつつも、その判断の幼稚さにあきれている。

エ　父のしたことに責任を感じて、お金を店のために遣おうとする私のいじらしさに心を痛めている。

オ　私が自身の今後を慮ることなくお金を遣おうとするのを見て、店の存続に自分を恥じている。

［答］　ア